

彙報

●史學研究會

大會 昨年十一月二十二日午後一時より京都帝國大學
樂友會館大講演室に於て開催、左の二氏の講演あり、其
間例年の如く評議員の改選を行ふた。

足利時代に於ける上流武士の公私生活（大館持房行狀
の研究）
文學博士 三浦 周行君

本號に掲載せられたるを以て略す。
隋書に見えたる琉球國について

文學士 和田 清君

琉球と云ふ名が隋書に初見する事は學界周知の事實であ
るがそれが今の何處を指したものと云ふ問題に至つて
は異論百出、或は今の琉球に他ならずとし、或は今の台
灣に比定するあり、更に琉球臺灣共に包含するご主張す
る。和田氏は先に東洋學報第十四卷第四號に於て「琉球
臺灣の名稱に就いて」と題し之に對する意見を發表され

たが今度の講演に於ても所説の基礎は變らず、更に精細
に入り立證點を八ヶ條に分ち隋書琉球を臺灣と見る事の
妥當なるべきを説かれた。詳細は近く歴史地理誌上に掲
載される筈である。

●京都帝國大學文學部史學科

滿鮮旅行日記（上）

昭和五年十月十一日

西田教授引率の下に一行二十三名下關行急行列車に乗
車、午前八時五十三分京都驛を出發、午後九時四十分下
關驛着、直ちに關釜連絡船に乗船。午後十時三十分碇を
捲いて出帆、愈々内地を離れた。三等船室に鮮人勞働者
が多い。此の日天氣晴朗なれ共浪高く一行大いに苦む

十月十二日

午前八時突兀たる山々に迎へられて釜山に入港、白衣
の鮮人を見る事稀なりご雖も、内地に於けるご異りて感
ぜられ、朝の陽光を浴びて一行の勇氣百倍、昨夜の苦を
忘れ果てたやうである。

釜山港驛内小食堂にて交々朝飯を喫し、奉天行列車に

乗込む。所謂範軌にて室内宏潤、感じ好き事昨夜の船室の比でない。

釜山港上陸後一時間にして出發。一行は將棋、トランプに興する者あり、窓外に異郷の情趣を求め且談笑する者あり、天日快明、季は秋にして、今日は日曜なる故か沿線に屢々大國旗の下に朝鮮兒童の群集して嬉々たるを見る。即ち陸上競技會である。

總督府の造林計畫も未だ漸く其の緒を終んごするに止り、林相は立木度頗る貧弱、而もなほ往時に比し數段の進歩を聞きて驚く。年々洪水に禍さるゝ朝鮮を改善する第一歩は造林事業にあるべく、此れが完成に邁進さるゝ當局の苦心を瞭察し、其の成功を祈る。

午下列車は秋風嶺驛に着く。京釜本線中の最高地にして空飛ぶ飛行機も難所とするところを。文祿の役に黒田長政小早川隆景の別働隊は此の地に於て張智賢の防戦するを破つて清州に出で更に京城に迫つた。列車に給水する暫くの間を一行は下車して秋風嶺の雄姿をカメラに收め驛を逍遙する。史的回顧を墨畫的風光に、此の驛は鮮

内諸驛中最も印象深きものと語合つた。

秋風嶺より一百哩、早くも成歡に着く。日清戰役史の第一頁に置かるべき月峯山、安城渡も驛に近い。高麗の太祖王建發祥の地松都は即ち今の開城に當る。願くは變らぬ山河の形勢なりとも見て亡びし國を偲ばんご思つたが眞の闇で如何にもし難い。此のあたりより一行の多くは寢臺車に赴き、殘留組は餘澤を蒙つて長々を席を取る。

十月十三日

列車は朝霧の立籠めた鴨綠江上を通過する。千噸の汽船を通航せしむるを稱せらるゝ鴨綠江は滿々たる水を湛へてゐるが、一箇月後には江水凍結して四箇月間人馬の往來を許さぬ聞き、其の頃の壯觀を偲ぶ。鐵橋を渡り盡せば安東驛で、停車四十分間。驛は小高く位置し、市街は其の下に展開する。金モール附の帽子に折襟のスマー卜な車掌は一行の爲に説明の勞を執る。

滿洲の一言へば人多く千里の曠野を想起し、吾人亦しかく考へたが、安奉線百七十哩は、奉天側數十哩を除き他は長白山系の山岳溪谷地を通じ風景隨て單調ならず、

且つ沿線許多の戰蹟は常に吾人の心を惹きて寧所あらしめず、安東出發以來比較的意屈を覺えずに旅行し、午後一時奉天に着く。

奉天驛前の壯大な市街は先づ吾人の目を奪ひ、次に居並ぶ馬車に歡喜した。一行は七輛の馬車に分乘し、旅宿瀋陽館に寄り、荷を置き直ちに實勝寺見學に赴く。

滿洲に於ける他の多くの寺と同じく、本寺も屋根は低い。黄色の葺を以て葺かれたるを以て多く黃寺と呼ばれ皇寺とも稱する。本寺は都城鎮護の爲め崇徳年間勅建せられたる四喇嘛寺の總本山と言ふべく、山門、鐘樓、天王殿嗎哈喇樓等の結構大ならざるも昔乍らに完全する唯滿洲名物の黃塵は其の全屋を蔽うて稍不潔の感あるを免れぬ。庭前に綱を縦横に張り、乾物の如く掛けられた大小の畫布は、信者の以て運命を判斷するものである。僧侶に若干金を與へて本尊を拜觀し本寺を辭す。

實勝寺より約二十五町、郊外に馬車を驅つて北陵に詣つ。黄土の太平洋中に浮ぶ孤島の如く、灌木、喬木の繁茂した大森林に圍繞されて、黃蕤碧瓦の殿樓が一つの別天

地をなす。本陵は崇徳八年の築造にかゝり、翌順治元年太宗を葬つたもので、陵域は周圍二里餘、外壁九百間、内壁の高さ二丈餘あつて小城廓の觀がある。人柱を用ひたこの傳説を秘めた壯麗な牌樓を通り、前山門に入れば古松の綠濃き境内で磚道の續いた兩側に種々の石獸の配されたのを見る。次に碑亭に達する内に康熙帝の撰する所の「昭陵聖德神功」を漢滿蒙三文を以て刻した頌德碑を建置する。碑亭の背後に三層樓をなす隆恩門を入れれば廟の拜殿たる隆恩殿に達する。殿前に玉階あり、五爪の龍を陽刻す。西田教授外數名玉階に立ちてカメラに入る。玉階の側方に位置されたる香爐は、珍しくも大理石造りで、其の彫刻も亦頗る見るべきものがある。隆恩殿の後方、明樓には漢、滿蒙三文を以て「太宗文皇帝之陵」を刻した碑がある、即ち墓標である。明樓の裏側に丈餘の石柱一對があり、上に置かれた唐獅子は嚴重に鐵鎖を枷せられてゐる。嘗て其れが逃亡して探索の末北京に於て發見されたこの傳説に基く。

隆恩殿を圍む壁上は廻廊様に造られ、而もそれは障壁

と鏡眼をもち嚴重の構である。明樓の奥に半圓形の壁を廻らして圓墳がある。即ち寢陵で孝端文皇后を合せ葬る

我日光と相前後して造營され、而も其の結構壯麗なるに至つては、遠く我を凌ぐと稱せらるゝ、北陵は、寔に清朝全盛期の代表的傑作と言ふべく、今、公園として保存の道を講ずるに共に、奉天人士の行樂地として開放せられ居るは、太宗皇帝に取り幸なるか不幸なるか、將又彼の爲に慨すべきか喜ぶべきか、國體の差違を考ふれば、輕々に論じ難い。

北陵より法輪寺に向ふ。途次東北大學前を過ぎる。排日親米の大學で、創立の年紀であらう本館正面玄關の上に大きく「西」西洋紀元を以て刻したる其の徹底振は徒に一行の苦笑を買つた。

法輪寺は四塔の一、地戟門外に在つて北塔と稱せられ其の塔は基壇、塔身、相輪の三部から成り、特に基壇には半肉彫の獅子像がある。法輪寺は四塔中殊に名高く、(四塔中廣慈寺は日露役の兵燹に罹りて燒失した)其の陰陽合體の天地佛の御開帳を拜しては、如何に學問的研究

とは言へ、若き一行は些か赤面せざるを得なかつた。本堂前左右に古木一本宛あつて、枝の大きく岐れた三股に額を恭しく載せたのを見る。本寺も屋根低く、又不潔の點に於て實勝寺と同然。而も兎に角七堂伽藍缺くる所なく完備してゐる。本尊に至つては、當世所謂エロ百%なるに而も其れが嚴肅な國家鎮護の大任を負擔せし所に、滑稽味と問題を含む。

赤陽將に平原の彼方に沈まんとする頃一行は辭去して歸路に就く。支那町に入れば混然雜踏して苦力の高聲が喧しい。

馬車は一飯莊の前に停る。先輩黒田博士等の招宴である。黒田博士の説明附で珍味佳肴に舌鼓を打ち、主客交交健康を祝し乾盃獻酬し、やがて自己紹介も終り、滿洲瞥見談に花を咲かせて時餘の後宴を閉じた。旅行團は奉天到着より出發迄先輩諸氏の尠からざる御配慮に依つて、短日にして而も有效愉快に見學を試むるを得た。此の機會に於て、自分は旅行團一同の名に於て深甚なる謝意を表さねばならぬ。

宴果て、一行は夕刻に一變して淋しき通りを、三々五々打連れて瀋陽館への歸路を辿つた。時に午後八時半。此の夜は自由行動にて、皆土産物買入れに出掛けた。

十月十四日

今朝六時三十五分奉天發撫順に赴く。八時四十分撫順炭鑛中央事務所に到り屋上より炭鑛の全域を望見し説明を聞く。

撫順炭鑛の發見は記録の徵すべきものなく、其年代は未詳なるも、各所に發掘さるゝ陶器製造窑、古錢又は陶器の破片及び口碑等に基き、凡そ七百年前高麗人に依つて陶器製造の燃料として採掘せられたるものと云はれる。後高麗人は後退し、清朝に及んで、乾隆年間此地が北陵東陵に近く、石炭の採掘は風水に害ありとの迷信で嚴禁された。光緒二十七年に此の迷信から脱し、採掘公許せられて支那人に依り事業が興された。爾來經營者の國籍を代ふる事三度、今や我滿鐵の一事業として此を經營し、益々盛大に赴きつゝある。

埋炭量の豊富なる千金寨の上に市街を建設し、後に其

の大なる埋炭量を知り、折角完成せし市街を露天掘のため破壞し、支那町を残して日本人街は小官屯、山嘴子方面に移動するこいふが如き悲喜劇の演ぜられてゐるのも炭鑛都市に相應しい。

午前九時十分、事務所を辭して古城子露天採炭所に行く。此の採炭所は規模最大で、將來更に三倍に擴張する豫定あるも、現在既に一日一萬噸を採掘し、全坑出炭の半を占むる由。元は此の上に支那町の在りしを大正六年買收し、町を破壞して發掘を開始したのである。

十時二十分此處を辭して油母頁岩採油工場に行く。油母頁岩は撫順炭田の主要炭層を被覆し、一二〇米乃至一七〇米の厚層をなして存在し、埋藏量實に五十四億噸と稱せらる。本工場の内熱式純撫順式乾溜法は木村技師(現九大教授)の發明である。而して其の處理されて生産する品量は、第一期計畫に於て次の如くである。

重油	約六萬九千噸	粗パラフィン	約九千噸
疏安	約一萬八千噸	骸	約五千噸

午前十一時本工場を辭去し、驛に向つた。因みに西田

教授初め數氏は露天掘事務所に發掘土器古錢の調査に赴かれて、本工場には同行されなかつた。

奉天歸着。

撫順より奉天に歸着した一行は、直ちに市内見學を試み、先づ滿鐵公所に赴く。本公所は滿鐵の外交機關として支那側との一切の交渉に當る。案内されて階上に上れば、張作霖氏二十九歳の折馬賊より歸順して巡防中前營統領として任せられたる際の記念寫眞がある。學良氏折々來つて此れに接し懷舊父を偲ぶ。屋上バルコニーに出る。公所に隣接して奉天青年會館がある。折々此處で排日演説ある由、公所の前方に聳ゆる大洋風建築は、一世の奇傑張作霖氏逝いた後御曹子學良氏が部下楊宇廷氏を自ら誅殺した所である。楊氏は親日家として、又作霖氏部下筆頭として重きをなし、作霖氏逝去後の彼は、學良氏に對し陽に輕視の風あり、殊に楊氏伏誅の數日前彼の父の誕生祝があつたが、其れに對する奉天人士の贈物は、作霖氏以上のものがあつた。かねて側近に聞いて疑を抱いた學良氏は、叙上の實際を見るに及び、其の先考

の威望早くも楊氏に移るを知り、彼に對する殺意を生ぜしものならん。此の殺害事件後學良氏の威望は一躍昂騰し今や勢威滿洲を出で、中原に普きは日常の新聞紙上人のよく知る所である。本所で茶の饗應を受けて、後宮殿及文溯閣の見學に馬車を驅る。

宮殿は清の太祖及太宗の宮室で、崇徳二年の建造に係る。大體三區劃して中央に大内宮闕、東西に夫々大政殿文溯閣がある。一行は先づ中央の大内宮闕に行く。入口に博物館と書いた看板がある。順治帝は卽位の年北京に遷都し、其の後宮殿の修理は北京内務府の管掌に屬し、康熙十一年重修し爾來應修の箇所あれば該府より工部に移牒し、吉日を選びて修理するの制があつたが、道光帝の巡幸以後復た天子の東幸なく、從て修理怠廢し今は見る影もない。正面の粗末な逆茂木を見て吾人は先づ豫想を裏切られて一驚を喫した。大清門は閉ぢられ、一行は傍の通用門より身を屈して入る。(表敬に非ず、門の低き故なり)此の一扉は、東に飛龍閣、西に翔鳳閣、正面に崇政殿がある。前二者は共に嘗て文武大官の溜たりし所

で、後者は即ち正殿で、北京遷都後も諸帝奉天行幸の度に朝儀を行つたこと云ふ。崇政殿を始め何れも錠を掛け、開扉を許されぬ爲唯外部より隙見するに止つたが、崇政殿内中央の玉座は、錠孔から覗いた一斑を以てしても、雄麗を極めたものであつた。殿前の右に日晷、左に嘉量がある。崇政殿の後に日華樓、霞綺樓あり、前者は王子後者は皇女の各々勤學所たりし所で東西に相對してゐる又崇政殿の北側には厨房及食堂たりし師善齋、協中齋があり、其の正面には三層の鳳凰樓が立ち、此の背後に往時皇帝の便殿たりし清寧宮があり、更に其の西に衍慶、麟趾の各宮がある。此等は皇后、皇子女の居所と傳へられる。

次に、隙覗した所で、正確を缺くが、各宮内に保存する、所の品名を列擧する。

- 一、協中齋（第捌陳列室の看板あり。博物館當時のものか）歴代皇帝、皇后の御影、及宸筆類。
- 一、清寧宮（看板第五陳列室）御影、陶器、机等
- 一、麟趾宮（第陸陳列室）鏡、冑、弓箭等武器類一般。

一、衍慶宮（第築陳列室）御影。

崇政殿以外はガラス格子戸で見學比較的容易であつた。各陳列室には禁止動手、照像、吸捌の制札が立、ある。尙第捌陳列堂前に一箇の小石棺がある。其の銘に曰く、承奉即守責德洲觀察判官試大理司直司緋魚袋孫。

開泰七年歲次戊午

（判讀の違が無かつた故、此の銘に讀違ひを生じてゐるかも知れない）

次に博物館（即ち大内宮闕）の西に隣接する文溯閣の一劃を見學する。文溯閣は此の一劃の最奥部に在る。此の一劃の入口即ち正門には遼寧省教育會の看板と、斯文在茲の扁額を掛けてある。此の一劃の建築物は文溯閣を除きて概ね平屋で、彩色及彫刻共に見るべきものがあるに拘はらず其の内部は全く遺憾といふの外はない。

小門を通過すること兩三度して文溯閣に達する。正面上部に文溯閣と漢滿兩文で大書された扁額を掲げた三層樓の外形は、決して人の想像する程大ではない。四庫全書六七五二函は民國三年北京に移藏されたもの

み聞知つてゐた吾人は、今其の全巻を目前にして驚喜讚嘆するのみであつた。而も室内には精製書函の薫香が籠めて更に吾人をして肅然襟を正さしめた。

書籍は、其の第一枚表に「欽定四庫全書考證」を右上に書し、行を改めて「卷三經部」一例と書いてある。而して中央上部に約方三寸五分(或は四寸か)「文溯閣寶」の印文を有する朱印を捺してある。

文溯閣の左側に「御製文溯閣碑」一基がある。表は漢滿兩文で誌され、乾隆四十七年五月の建立に係る。其の裏面に漢文のみの「宋孝宗論」を刻し、時間に餘裕なき爲め全文を通讀する邊は無かつたが、宋孝宗の孝を評し、更に高宗?の孝を贊して曰く。

兩處各立碑誌之以示天子之孝當以不失祖業爲重而承觀養志固不在遊山玩景之小節也。云々。

午後三時四十分本圖書樓を辭して四平街なる吉順絲房綢緞布莊に馬車を驅る。奉天に於ける三越と言ふ可く、建築亦洋風である。屋上より城内は一望の下に在り、内外城壁は蜿々として人家稠密なる市街を圍繞し、外は直ち

に黄土の海で全く接續都市といふべきものを見ない。

一行は本店にて眺望を恣にし、土産物を購ひ、午後六時旅館に歸る。夕食後自由行動を取り、十時三十分迄に奉天驛に集合する事となつた。(谷口)

● 讀 史 會

例會 昨年九月二十六日午後六時三十分より京大樂友會館階上第一號室に於て開會。三浦教授中村助教以下會する者三十三名。左の研究發表ありて午後十時盛會裡に散會。

三井の末寺一乘寺に就いて 二回生 福尾猛市郎君
維新前後の思想史の研究に就いて
文學士 徳重 淺吉君

明治初年に於ける法制に就いて

文學博士 三浦 周行君

例會 十一月十四日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開會。三浦教授、大塚講師其他會する者二十名。左の研究發表ありて後讀史會二十周年記念大會の打合せあり。午後十時四十分散會。

建武以來追加の年代考 三回生 赤松 俊秀君

醫道の上より見たる國學者谷川士清の思想

醫學博士 加藤 竹男君

英人のアイヌ墳墓發掘の一件に就いて

文學士 大塚 武松君

廿周年記念大會 十一月廿九日京大樂友會館に於て、

正午開場、午後一時より講演會公開。聴衆四〇〇名。

一、講演

開會の辭 谷口 忠夫君

封戸の變質と莊園の發生史 文學士 牧 健二君

東廻海運に就いて 文學士 古田 良一君

僧團會議法の一齣 文學士 中村 直勝君

公家文物より見た應永前後 文學士 栗野 秀穂君

靈島傳説 文學博士 西田直二郎君

明治の動き 文學博士 三浦 周行君

閉會の辭 谷口 忠夫君

二、史料展観

三浦教授蒐集する、所の貴重史料百六十四點の展観あり。

り。何れも學界の至寶と稱すべきものであるが、特に注意するべきもの若干を掲げる。

第一部 法制史料四七點中、律令以下御成敗式目等の古寫本、從來僅か三箇條を傳ふるに止まりし嘉祿元年の新制三十六條の殆き全部を収録せし「新編追加」御成敗式目最古の註釋書たる「御成敗式目唯淨裏書」及近世に於ては徳川幕府評定所の「御仕置例類集」等がある。

第二部 國史史料は記録文書筆蹟繪圖等七三點。副本なき「尊鎮法親王御記」「大館持房行狀」を始め實朝、秀吉の奏狀、田付流砲術傳書等の貴重な文書記録が多い。

第三部 朝鮮史料二〇點中に於て、「高麗版大藏經」の「瑜伽師地論」「一切經音義」を初め「鄭元容自筆日記」「修信使金綺秀日記」、「日本古蹟」等特に注目された。

第四部 歐米史料二四點は教授洋行中の蒐集に係り我國に於ける唯一の存在たるパピルスの繪畫を初め、桃山時代より徳川時代に及ぶ外國文書數點及び日本關係の歐米版書籍二十點殊に耶穌會關係のものに稀書が多い。

三、晚餐會 參會者四十八名

講演會後直ちに三浦教授渡支送別を兼ねて開會。席上今回記念事業の一として編纂された「讀史會卅周年史」を頒ち、同じく會員の醜出になつた本會獎學資金を大學へ寄附した経過の報告あり。三浦教授の發聲で讀史會萬歳を三唱し、又西田教授の提議で三浦教授の健康を祝して各乾盃の後會員一同交々起つて感想を述べ、師弟先輩後生共に歡を盡して意義ある大會を畢つた。時に十一時。

● 東洋史談話會

樂友會館第一號室に於て開會。左の講演あり。

第十三回 九月廿九日(月)午後六時

明代の建州女直に就いて

鴛淵 一氏

唐の長安の都市計畫に就いて

那波 利貞氏

第十四回 十月二十七日(月)午後六時半

笑話童約についての小研究

宇都宮清吉氏

兩漢律令考

小川 茂樹氏

滿鮮旅行談

内藤 戊申氏

第十五回 十一月二十五日(火)午後六時半

突厥の巫覡

内田 吟風氏

滿洲に於ける高勾麗山城の遺跡の配置

横地 得三氏

コズロフミツシヨンについて

石濱純太郎氏

● 西洋史讀書會

例會 九月二十五日午後六時より樂友會館に開く。來會者二十名。

此度、海外より無事御歸朝の原隨園先生の歡迎會を催す、時に御滯洛中の大類先生の御出席を仰ぐ。時野谷先生より「我西洋史料にはルネッサンスの曙光表はる」の御言葉があつた。別室で次の御話を聞き歡談後九時半散會。

ギリシャの古陶器

原 隨園君

例會 十月三十一日午後六時半より樂友會館に開く。

來會者十七名、歡談大いに興り、散會十時半。

十六世紀に於ける中産階級の傾向 清水 巖君

Bury: The Invasion of Europe by the Barbarians 鈴木 成高君

例會 十一月二十一日午後六時半より樂友會館に開く。

來會者十七名。しかも時、史學研究會大會の前夜にて地方より先輩を迎へ、大いに談ず、散會十時半。

中世獨逸皇帝傳説

鹽見 高年君

原始ギリシヤ民族ベラスゴイに就いて

吉原 好人君

● 明治史研究會

第拾壹回例会 六月十七日午後六時半より樂友會館に於て開催、三浦教授牧教授以下拾八名左の講演あり十時散會。

一 明治維新に於る宮津藩に就て

加藤鐵三郎君

一 明治初年の教育制度

高橋 俊乘君

第拾二回例会九月卅日午後六時半より樂友會館にて開催。三浦、石橋、牧諸教授以下拾四名、左の講演あり、十時散會。

一幕末に於ける百姓一揆の一考察

松岡 憲一君

一 明治初年に於ける外國貿易について石橋 五郎君

洛北岩倉村史蹟訪問 拾月卅日午後一時出町柳發參加

者牧教授以下拾八名、秋雨の中に實相院、岩倉公遺蹟保

存會を訪ひ多數史料展觀、會員相互の親睦を重ねて四時過ぎ歸着散會。

第二回公開講演 十一月十六日午後一時より樂友會館

にて開催、左記講演及び史料展觀を行ふ、聽衆百五十、午後六時閉會、後晚餐を共にし食後歡談、十一時散會。

一幕末思想の一考察

吉田 三郎君

一 王政復古の一考察

牧 健二君

一幕末に於ける日英佛關係の一考察 大塚 武松君

一 明治初期の明治天皇

三浦 周行君

● 民俗學研究會

第三回民俗調査

場所 愛宕郡鞍馬貴船

時日 六月十五日

例会 七月一日午後六時半より百萬遍かぎやにて開催

西田、梅原先生以下十九名出席。十時半散會。

一 越前の産小屋について

梅原 末治先生

一 鞍馬、貴船民俗調査報告

例会 十月七日午後六時半より百萬遍かぎやにて開催

喜田、西田先生以下二十七名出席。十時閉會。

一 唾の話

井上 頼壽氏

一 オシラ様について

喜田 貞吉先生

例會 十一月十日午後六時半より百萬遍かぎやにて開

催。出席者、西田、金關先生以下三十二名。十時散會。

一 岩倉の火祭

三宅 宗悅氏

一 大將軍祭

向居 淳郎氏

第四回民俗調査

場所 愛宕郡花背村別所

時日 十一月十五日、十六日

例會 十二月一日午後六時半より百萬遍かぎやにて開

催。十時散會。出席者西田先生以下二十名。

一 呪術と神道

吉田 三郎氏

一 鞍馬の竹伐

肥後 和男氏

一 花背民俗調査報告

會報

● 評議員改選

昨年十一月本會大會に當り會則により評議員の改選投票を行ひ其の結果新評議員として石橋五郎、羽田亨、原隨園、濱田耕作、西田直二郎、那波利貞、中村直勝、桑原隆藏、矢野仁一、三浦周行の諸氏當選したり。

● 寄贈交換圖書

史學雜誌 四一の九、十、十一	史學會
史學 九の二	三田史學會
民俗學 二の九、十、十一	民俗學會
考古學雜誌 廿の九、十、十一	考古學會
人類學雜誌 四五の九、十、十一	東京人類學會
大谷學報 十一の三、四	大谷大學大谷學會
國史學 四	國史學會
歴史地理 五六の三、四、五	日本歴史地理學會
伊豫史壇	伊豫史談會

經濟論叢 卅一の四、五、六

經濟學會

顯真學報 一

顯真學苑

宗學研究 一

大谷派本願寺宗學院
立教大學史學會

史苑 五の一、二、四の六

國學院大學

國學院雜誌 卅六の十、十一、十二

國學院大學

史蹟名勝天然記念物 五の九、十、十一、十二

同保存協會

勢陽論叢 一

神宮皇學館研究室

刀劍研究 一七三、一七四、一七六

南人社

東洋學報 十八の四

東洋協會學術調查部

史跡之美術 一

史跡美術同致會

史學研究 二の二

廣島史學研究會

青丘學叢 一、二

青丘學會

王朝教育史資料(春川作樹編)

長崎書院

展覽目錄

東北帝國大學法文學部

史學棟志 二の三、四

南京中國史學會

眞宗學報 七

眞宗專門學校

北方郷土 一の一

函館郷土研究會

西洋史講話(箕作元八著大類伸補訂)

開成館

寫經より見たる奈良朝佛教の研究(石田茂作著)東洋文庫

近代日本外國關係史(田保橋潔著)

刀江書院

雲南民族調査報告 國立中山大學語原歷史學研究所

切支丹大名記(シユタイシエン著、吉田小五郎譯) 大岡山書店

民俗學の話(ベヤリング、グウルド著、今泉忠義譯) 大岡山書店

雜誌索引 八 下戸前繁松

●會員動靜

●入會

●入會

埼玉縣川口町榮町北三丁目一〇八二 石川利三郎氏

右紹介者 松本彦次郎氏

京都市左京區淨土寺馬場町三二 山本方野村 政光氏

九州帝國大學法文學部 長 壽吉氏

京都帝國大學農學部農林經濟學科農史研究室 長 黑正 巖氏

右紹介者 島田貞彦氏

京都市上京區北白川西町一三四 河方 靱男氏

右紹介者 阪倉篤太郎氏

●退會

齋藤 俊次 若成久治郎 江藤 激英 小津清左衛門

●死 亡

青木 重保氏 佐藤 一雄氏 龜崎光次郎氏

右謹みて哀悼の意を表す。